



2023年度一般社団法人 日本乳幼児精神保健学会

第3回 JAIMH学術集会報告

大場 エミ

2023年12月2日、3日横浜市みなとみらい地区にて第3回学術集会が開催されました。

ハイブリットで開催され238人と多くの方に参加していただきました。

今年のテーマは「乳幼児の心の育ちを乳幼児と家族の症例から学ぶ」です。

12月2日は虐待を受けて育ち、大人になった人々のその後の映画「リアルボイス」を市民公開講座として上映されました。この映画の監督である山本昌子さんが映画の紹介とともに「スリーフラックス活動」を紹介してくださいました。この活動は養護施設で育った人などに、成人式に振袖を着て記念写真を撮る活動です。参加者からは「虐待を受けたり施設で暮らしてきた人たちがそれぞれ色々な思いを持っていることが分かり、悲しさや怒りだけではなくポジティブな思いもあるということがとても「リアル」だと感じた」などの感想をいただきました。

その後、天満敦子さんの美しいバイオリンの音色に心安らぐひと時を過ごしました。

牧大会長講演ではジグソーパズルを活用した診察のお話を大変興味深く聞かせていただきました。「子どもとの関わり方のヒントをいただくことができました。ほめること、できたという体験の積み重ねの大切さを学びました」と参加者も多くの学びがあったようです。

午後は 柳田邦男さん、いせひでこさんの絵本を通しての子どもたちへの支援活動のお話で絵本が子どもたちの成長に大きく役立つこと、また子どもだけでなく



「絵本は人生に3度」と高齢者になっても絵本を読むことの大切さのお話から、3度目の絵本を手に取りたいとの感想もありました。

12月3日は症例検討を4事例行いました。

- ①東日本大震災後「被災からはじまるあらたな葛藤」
- ②周産期「家庭訪問による早期母子関係性支援」
- ③乳児院「乳児院におけるネグレクト児の愛着修復の取り組み」
- ④児童施設「プレイセラピーで考える子どもの育ち」です。

参加者の8割の方から大変学びになったと高い評価をいただきました。

「すごく勉強になりました。スーパービジョンを共有できる機会をぜひまた企画してほしい」「症例検討をこれほど深く有意義に展開している学会はないと思います」「症例に対して専門家の先生方のアドバイスを拝聴し、先生方が普段大事になさっていることを改めて知ることができ、自分の知識不足で、子どもや、保護者が発している手がかりを見逃さないよう、もっと勉強をしないと強く思いました」「どれも濃厚で、気を抜く暇がないぐらいに聴きごたえがありました」「来年も絶対参加したい!と思いました」などの感想をいただき、今回の企画が大変有意義であり、今後もこのような症例検討を期待していることがよくわかりました。

来年度は10月12日、13日に浜松市で開催いたします。今回のご意見をもとにさらに有意義な学術集会を開催したいと思っておりますので、多くの方の参加をお待ちいたしております。

~REAL VOICE 心の声を届けたい~

「REALVOICE」監督 山本 昌子

私は、生後4か月から19歳まで東京都の乳児院、児童養護施設、自立援助ホームにて育ちました。保護理由は育児放棄です。

17歳から児童養護施設出身者としての当時者発信活動を始めました。発信テーマは「児童養護施設で育っても、血の繋がりはなくても幸せになれる」ということです。それを世の中に知ってもらいたいと願うほどに、私は恵まれた環境で育ちました。

そして、23歳の頃に振袖を通して「生まれてきてくれてありがとう」を伝えたい、そんな思いを胸に振袖を着る機会を提供するボランティア団体ACHAプロジェクトを立ち上げました。

ヘアメイク、着付け、カメラマンすべて無償ボランティアで協力してもらっています。成人式当日の貸し出し、そしてメインは前撮りや後撮りとして写真に残す事です。後撮りには、年齢制限は設けていません。何歳になっても振袖を着れなかった思い、写真に残せなかった事を悔しく悲しく思っている人の気持ちにも応えたいからです。

撮影場所もできる限り本人達の希望に沿うようにしています。一番多い場所は、自分の育った児童養護施設で撮影したいという依頼です。18歳になると児童養護施設を基本的には卒園し、自立を余儀なくされる現状がまだ沢山あります。どこことなく今住んでいる子達や職員さん達の多忙さを気遣い施設に寄り付かなくなる子も多いです。孤立と孤独が目の前には広がっています。しかし、この振袖がそんな職員さんと若者の心を繋ぐことも多くあります。

撮影の際には、自分の大切な人にも見に来てもらうことも大切にしています。最初は「呼ばなくていい」と気遣う子達もプロジェクトから声をかけ、当日来てくれた職員さんの姿に緊張していた笑みが一気にほぐれてとても嬉しそうはしゃぎます。離れていても自分を思ってくれている姿を実感する瞬間です。児童養護施設の職員さんにとっても、若者の振袖姿が最高のご褒



美になることを願っています。

男の子には袴を用意しています。近年では、七五三やお宮参りの撮影、専門学校や大学の卒業の際の袴の貸し出しなども行なっています。

振袖を通して「死にたい」という思いを「生きててよかった」に変えられるようにこれからも活動を頑張りたいと思っています。

そして、コロナをきっかけに振袖撮影の活動が一時休止したのをきっかけに、ドキュメンタリー映画「REALVOICE」の制作を始めました。全国70名の虐待された経験のある若者達を撮影するために日本全国を周りまわりました。

その中で見えてきたのは「虐待は大人になって終わりじゃない」ということです。

主題歌を加藤登紀子さん、挿入歌を一青窈さんに無償提供して頂きました。キャストやスタッフも無償ボランティアにてお力添え頂き、そのお陰で現在無料にて映画を届けることが出来ています。そんなみんなの思いはひとつ「虐待」がどういふことを多くの人に知ってもらいたいということです。

現在、YouTubeとU-NEXTにて無料公開しています。そして全国各地で無料上映会が実施されています。多くの人にこの映画が届きますように心より願っています。

YouTubeの無料公開はこちらからご覧いただけます



大会長講演

牧先生の講演にはいつも驚きと感動があります。今回の講演ではジグソーパズルのこととお話しになりました。

牧先生は実際の診療でジグソーパズルを取り入れているそうです。パズルを作らせながら、子どもの認知機能や行動パターンを観察し、それを実際の臨床症状と照らし合わせると言うのです。その子の発達のレベルに合わせ、ピースの数を決めるのだとか。



大会長 牧 真吉

子どもがどんなピースを選び、それをどのようにはめて行くか。そこに子どもの認知機能のパターンが見えてくると先生は仰います。そして時間内に終わることが出来るようにピースの数を設定するのだそうです。「最後はパズルを完成させて終了。達成感を持って終わらせることが出来る。WISCなどの知能検査は子どもがどこまで出来るかで判断する。と言うことは言い換えればどこまで出来なくなるかで終了。そこには不全感が残り、そんな残酷なことはない」となるほどと感心しました。

ストレンジシチュエーションテストについてもお話しされていました。「日本では親が子どもを置いて、いなくなるなんて事はない。文化の違いだ!愛着パターンを診断するのに日本人があのような検査法を思いつくはずがない!」なるほどと思いました。

牧先生には昨年の名古屋大会に引続いての大会長役でお疲れ様でした。学会員を代表して感謝の意を表します。

症例検討

いきいきとした症例からそれぞれが学びを得る

日本乳幼児精神保健学会JAIMH第3回学術集会の大きな目玉は2日目の症例検討会でした。

過去に勉強会で症例検討することはありましたが、症例検討を中心にしたJAIMHの学術集会は初めてです。個人情報配慮について検討を重ねながら、学術集会で症例検討会を行うことができました。

テーマに分け、以下4症例から学びました。

- 1 東日本大震災をテーマに「被災からはじまるあらたな葛藤」
- 2 周産期をテーマに「家庭訪問による早期母子関係性支援」
- 3 乳児院から「乳児院におけるネグレクト児の愛着修復の取り組み」
- 4 児童養護施設から「プレイセラピーで考える子どもの育ち」

やはり症例から学ぶことは大きく、それぞれの現場で苦労されていたり、子どもと心が通った感動的な場面がとても生き生きと伝わってきました。

皆さまもご自分の職場、担当の子どもや家族と重ねながら聴くことができたのではないのでしょうか。

1日に4症例を聴き、大きな満腹感・満足感に包まれながら帰宅しました。

今年の元旦に能登半島地震が起きました。大津波警報のニュースに、日本中が13年前の東日本大震災の記憶が蘇ったお正月でした。症例検討のときにはまさか元旦に人々の暮らしを瞬で壊す規模の震災が起きるとは誰も想像していなかったと思います。

私たちは経験を通して、症例を通して学び続けること、そして日本、世界全体でつながり学びを深めることが大切だと改めて痛感しています。

広報委員 香取 奈穂



被災者自身による被災地支援～能登半島の未来

2024年1月1日、能登半島に強烈な地震が発生し、津波が襲った。建物が壊れ、道路が寸断され、238人(1月31日現在)の方が亡くなっている。圧倒的な自然の力は、これまで積み上げてきた人間の暮らしを一瞬で無かったものにしてしまう。人々の暮らしが壊れ、近親者の命が危険にさらされ、家族が離れ離れになる様は、痛みそのものであり、生きるか死ぬかの選択を迫られる恐ろしい現実である。

発災から数年間は緊急支援と称し、被災地には外部から「ヒト」「モノ」「コト」の様々な支援が届く。でも、それは、あくまでも緊急支援である。地域の文化、コミュニティ、こころを伴った真の復興のためには、それを知り尽くした被災者自身の自立が不可欠である。被災者自身が見えない大事なものを積み上げ、こころと身体との両輪が回復する新しい暮らしを構築していくことが必要になる。

私が住む地域は、2011年に東日本大震災を経験し、福島第一原発事故を抱えているため、今も被災し続けている。放



射能による終わらない環境汚染と、それに伴う人々の身体的・精神的負担は計り知れない。国は、国家的観点から被災地の利用方法を模索し計画を立て、日本の国の駒の一つとしての役割を被災地に課す。そこに住む住民は、個人ではなく、一つのグループとして扱われる。

子どもたちの未来も同様である。そんな国や社会による「こころのない空虚な復興」から自分たちを救うのは自分たちしかない。「自分たちのこころ」をどう守り育てていくのかが被災地の未来につながるものと感じる。今回の能登半島地震で被害が甚大だった珠洲市の原発建設計画は住民の反対により凍結、建設に至らなかった。このことがどれほど大きな住民の功績であったか、福島に住む

私たちは骨身に染みて感じている。この土地の人々に、このこころが宿り続けている限り、いずれ被災者による被災地支援が始まり、真の復興も夢ではないと思っている。

認定NPO法人 いわき放射能市民測定室たらちね
理事長 鈴木 薫

第4回全国学会学術集会 浜松大会開催のお知らせ

会期 2024年10月12日(土)、13日(日)
会場 浜松市福祉交流センター(静岡県浜松市)

テーマ 「妊娠、出産から始まる親子への寄り添い」
～子どもがかわいいと思える支援を 出会ったその時を大切に～

多職種の方々、保健師、保育士、幼稚園・小学校教諭、周産期・小児医療にかかわる助産師・看護師及び医師、臨床心理士・公認心理師、子育て支援されている団体の方々等のご参加をいただき、職種を超えた学びあいの場になるようなプログラムを検討しています。事例検討やポスター発表では十分な討議できるよう時間配分を考えています。また12日夜には

久しぶりに懇親会を浜松城が見えるホテルで開催、全国各地からご参加いただいた皆様を歓迎したいと計画しております。宿泊については学会が連休中の開催になりますので、事前のご予約をお願いします。なお学会会場は浜松駅から徒歩約7分であり、浜松駅周辺には多数ビジネスホテルがあります。実行委員一同皆様のご参加をお待ちしております。

(実行委員長 いぬかい小児科 犬飼 和久)

この度の能登半島沖の大地震と津波災害でお亡くなりになられた方々に
慎んでお悔やみを申し上げますとともに、被災された皆さまに心よりお見舞い申し上げます。
当学会では災害時の子どもの心のケアについてのリーフレットを作成しました。右記のQRコードからご覧になれます。
どうぞご活用ください。



日本乳幼児精神保健学会 事務局

〒963-8871 福島県郡山市本町 1-13-17 医療法人仁寿会 日本乳幼児精神保健学会事務局
TEL 024-932-0154 FAX 024-932-0245
E-mail info@japan-aimh.com https://japan-aimh.smartcore.jp/

世界乳幼児精神保健学会 日本支部



会費のお振込みは下記の口座をお願いします

みずほ銀行(金融機関コード:0001) 新横浜支店(店番号:356)
普通預金 3055110 一般社団法人日本乳幼児精神保健学会